

特集

先人たちが編み出した 洪水に向き合う術

日本の土木史において、土木技術の近代化が大きく進んだのは明治中期に入ってからである。

河川分野においても、西洋の近代的科学の導入により水理現象が定量化され、それまで各地域の経験値に頼るところが大きかった河川工事は一定の基準のもとに進められるようになっていった。そして、生活の利便性や安全のために様々な河川構造物が建設され、一定の国土の整備も進んできている。

しかし近年、地球温暖化の影響もあり世界中で洪水や干ばつが増え、日本においても毎年記録的な豪雨が頻発し、深刻な被害につながることも少なくない状況となっている。現在の激しい気象変化による災害は、自然現象に対する人間の非力さを実感するものでもある。

こうした中、西洋の土木技術や土工機械を持つ以前の日本人に目を向けると、彼らには必ずしも強固な堤防や水門を造る技術はなく、時に自然に対し受け身にならざるを得ないこともあったであろう。その地域の特性に応じて、様々な工夫を凝らして命をつなぎ、地域を作り、生活や社会を守り続けてきたのである。その考え方や工夫は、今の我々にも参考となるところもあるのではないか。

彼らは、どのように水を確保し、どうやって洪水に対応し、その地域をつくり上げてきたのか。当時の制約の中で、先人たちがその地域特性を見極めつくりだしてきた技術や知恵をうかがうことができる施設や仕組みを紹介する。

① 高須輪中の平田鞠負像／松野奈実
③ 吉野川の高石垣／高見元久

② 手取川霞堤／松田明浩
④ 高須輪中の金廻四間門樋／佐々木勝
⑥ 佐賀平野のクリーク／国土地理院

